

# 大規模在外教育施設の学校運営と現地理解教育の実践

前バンコク日本人学校 中学部教頭

熊取町教育委員会 学校指導参事 谷 奥 滋

キーワード：現地理解，交流学習，現地語（タイ語）習得

## 1. はじめに

タイ王国は、私が赴任した2007年がタイ暦2550年で国王80歳の誕生日を迎え、日タイ修好120周年の記念の年でもあった。たいへん親日の国である。国土は日本の約1.4倍でバンコク周辺は平野が大きく、人口は日本の約半分ですが人口密度は低いが、バンコクをはじめいくつかの主要都市に人口が密集している。首都バンコクは人口800万人、在留邦人は4万人以上で、アジアでも有数のハブ空港であるスワンナプーム空港やレムチャバン港があり、1000社以上の日系企業が進出し、近郊には大規模な工業団地もつくられている。2009年度はバンコク日本人学校の小学部2000名の児童と中学部500名の生徒の約9割が日系企業の海外進出に伴ってやってきた子女で、2008年までの過去8年間は毎年100名ずつ増えてきていた。教職員も110名以上が日本人で、70名が文部科学省派遣教員、40名余りが海外子女教育振興財団の面接で採用した専任教員である。タイ国での私立学校としても認可を受けるために、小学1年生から週1時間のタイ語授業が義務づけられている。また、小学3年生以上では、週2時間の英会話授業をネイティブスピーカーの先生による少人数授業で実施している。小学校・中学校の新学習指導要領についても移行措置にともない、一部先行実施している。また、2009年4月に、バンコクから車で約2時間の地にシラチャ日本人学校が開校し、その開校準備にも関わってきた。私の赴任中の3年間における学校運営に携わった経験や感じたこと、取り組んできたことを以下に報告する。

## 2. 活動の実際

本校は、世界でもっとも歴史が古い日本人学校であり、小中併設の単一校としては最大の学校でもある。その学校での現地理解教育は、今までの積み重ねによって非常にしっかりしたものになっている。小学校1年生から学ぶタイ語学習を基礎にして、多くの現地理解教育が実施されている。

### (1) 現地理解教育

現地理解といっても様々であるが、全児童生徒が交流学習会ではマンツーマンに近い交流ができています。交流学習については、次項で詳しく述べるとして、それ以外にも、校外学習では、小学校で学校周り探検や、現地の交通機関（BTSとMRT）を乗車したり、日系のスーパーマーケットの見学や日系工場見学などを現地スタッフや多くの保護者のボランティアの助けを借りて、実施している。小学6年生の修学旅行では、チェンマイにて現地校訪問を中心に据えている。それから、29人いる現地スタッフ（校務員）から現地の遊びを教えてもらったり、タイの伝統的な行事のロイカトンについて体験したりもする。中学生は1年生ではタイでのJICAを中心とする現地での日本人の活躍を基礎にして、講演会を開催した後に現場を班別に見学し、2年生では日系工場見学、3年生では1日職場体験学習と、日本の中学校に負けない充実した活動を海外にて実施できている。しかし、教員が約3年単位で交替していくため、大きく内容を変更することも難しく、また、既に立てられた予定に追われるような状況も生まれてきている。

その中で何より大事なのは、直接子どもたちの教育に携わる教員自身が現地理解教育に関心を持ち、意欲的に取

り組むことだと考え、赴任1年目には実施していなかった希望教員向けに現地理解のための研修を、2年目の夏季休暇中に計画し、3年目も継続して実施した。2年目に実施した研修を例に挙げると、バンコク近郊のクレット島から焼き物のタイ人講師を招聘し、学校で教員向け半日研修を実施したり、国立博物館の日本語ボランティアによる説明会や、現地のインターナショナル校の見学会を開催したり、現地の心身障害者福祉施設の訪問を行ったりした。3年目には、半年前から準備して、個人では見ることができないタイ紙幣工場の見学やタイ王室が運営する王宮内の王様プロジェクト見学なども実施して、教員の現地理解を大きく前進させることができたと感じている。海外であるが故に、また、タイ語というなれない言語で意思の疎通が難しいことも原因で、なかなか計画が順調に進まないのが現実である。そのためにも、タイ人校長やタイ語教員、現地スタッフと意思の疎通を図ることが重要で、その協力なしにはどの研修も実現していないであろう。しかし、誰かが推進役となれば、大きく進むのもまた事実である。

子どもたちの反応はというと、小学生はすぐ何でも吸収していくが、来タイしてすぐの児童生徒や、来タイ後年数の浅い中学生などは、言葉の壁が邪魔をするだけでなく、積極性に欠ける場面もよく見られる。その時にサポートする教員の姿勢が大いに影響するのである。



## (2) 交流学习

長年の積み重ねから、超大規模な学校であるにもかかわらず、すべての学年でマンツーマンに近い交流学习会を毎年実施している。小学校1・2年生はカセサート大学附属小学校、3・4年生は国立グラカム小学校、5・6年生はシーナカリン大学附属小学校と交流学习会を毎年1日行い、中学生は全学年500人以上がチュラロンコン大学附属中学校と1000人規模の交流学习会を1日実施している。そのための準備には、事前の教員同士の交流会を含めて、数回実施しなければならない。また、中学2年生の3学期に修学旅行でスコタイに行き、そこではタイの芸術学校と交流し、その後、山岳民族のバーンムースー校とも半日の交流を行い、タイの文化や民族など現地理解に力を注いでいる。それらの実施に際してもタイ語教員の助けなしでは実現できないが、それに任せきりでは、新たな発展はないと感じている。この打ち合わせでも、担当学年の日本人教員の意欲がその学年の現地理解教育に大きく影響してくるのである。学校全体の現地理解教育に対する姿勢が重要なので、その核となる管理職が積極的に現地理解教育を推進することが、大きな意味を持つと考えて取り組んできた。

## (3) 現地語（タイ語）習得

私が赴任した年は、最初に述べたように日タイの間では重要な意味を持つ年であった。そのため、たくさんの行事が、多方面で開催された。赴任して1か月も経たないうちに在タイ国日本大使館と共催で日タイ修好120周年記念行事としての図画ポスターコンクールを開催する準備が進み、校長の指示を受けながらもすべて担当の私の采配に任された。7月中にタイの学校に作品出品の協力要請のために、交流校4校にタイ人校長と訪問したが、タイ語が理解できなければ、大変苦痛を感じたことであろう。

文部科学省派遣の管理職は、派遣前に語学研修として40分の授業を20回受講しなければならなかった。4日間でのマンツーマンの授業は厳しかったが、振り返ってみると、そのおかげで現地スタッフとのコミュニケーションや現地交流校との打ち合わせに際して大いに役立ち、相手のタイ人からも好感を持って接していただくことができたと感じている。また、赴任1年目の本校教員は全員、毎週2回の放課後、90分のタイ語の授業を合計40回受講する

ことが義務づけられている。私は、校務を調整して極力受講するようにしたが、それも大いに現地理解に役立ち、交流の際ばかりでなく、日常生活においてもあまり不自由することなく過ごすことができたのである。私自身が大いに現地理解を深めることができたのもこの語学研修のおかげである。

そのため、2学期以降にあった本校の母体の泰日協会が主催する日タイ修好120周年記念フレンドシップコンサートでは本校小中学生60名とタイ人中学生60人による合唱の練習や打ち合わせに際しても、スムーズにことが進み、大成功を納めることができたのである。その後に催されたタイ国日本人会主催のラムウォン盆踊り大会では、本校4年生と交流現地校4年生の演舞や盆踊りのコラボレーションを担当であった私に依頼されたが、それもタイ人校長の協力と本校教員の尽力により、無事終えることができ、2万人を集める大成功の盆踊り大会を実現することができた。その背景には、やはり現地の言葉であるタイ語を話そうとすることが、タイでは重要であると深く感じた。赴任1年目が大変重要で、その経験を乗り越えた私は、2年目、3年目の日常生活においても、タイ人と交流したり、外国人があまり行かないような観光地を旅したりと、日本に居たときに感じていたタイ国とは違った印象を持つようになったのである。今の私にとっては、タイ国は第4のふるさとといっても過言ではないと感じている。ちなみに、第2のふるさは生まれ故郷の和歌山、第3のふるさは妻の実家の大分と感じている次第である。時間が許すならば再びバンコクに行ってみたいと思っている。

### 3. おわりに

タイ国はタイ語を話す唯一の国である。日本と同様に母国語を大変重要視し、どの国民も戦争で植民地にならなかったことを自負しているところがある。日本人が日本語を話す外国人に親近感を覚えるように、タイ人もタイ語を話そうとする外国人には同様と考える。ここまででは書ききれないような日常生活の場面においても、タイ語を使おうとすることでどれだけタイ国理解が深められたことか計り知れないと感じている。特に学校の内規で、私の派遣時の派遣教員は、全員新車を買って運転手を雇わなければならないとなっていた。その運転手との意思の疎通も重要で、タイ語しか話せない人たちとのコ



ミュニケーションには欠かすことができないタイ語（現地語）をどれだけ早く使いこなせるかが、特に管理職には重要と感じた。校内においても、現地スタッフの校務員はタイ語しか話せない者がほとんどで、赴任当初は通訳のタイ人に指示し、それを校務員のリーダーに伝えてから全員に指示が伝わるといった具合で、通訳が銀行に行ったり、出かけたりしているとたちまち仕事がストップするのである。そこで、直接タイ人の校務員のリーダーにタイ語で指示をし、通じなければ身振り手振り、絵に描いたり、現場に行き、具体的に表現したりと工夫している中でも、タイ語を少しずつ習得していき、意思の疎通がだんだん図れるようになっていったのである。現地スタッフと同じ目線でものを見る姿勢は、相手にも自然に受け入れられ、そのおかげで赴任している3年間は、全く仕事の不安がなく、日本での経験以上にスピーディーに物事を進めることができたと感じている。

ぜひ、これから赴任が決まっている方や派遣を希望する方は、派遣先が決まれば、その国の公用語を勉強することをおすすめする。そのことが、その国の現地理解に大きく役立ち、子どもたちの教育のみならず、自分自身の生活すべてに役立つものと確信している。国際理解の第一歩は、コミュニケーションをとろうとする意欲である。私にとって、新たな発見の多い、素晴らしい経験をたくさんさせてくれた、大きな3年間であった。